

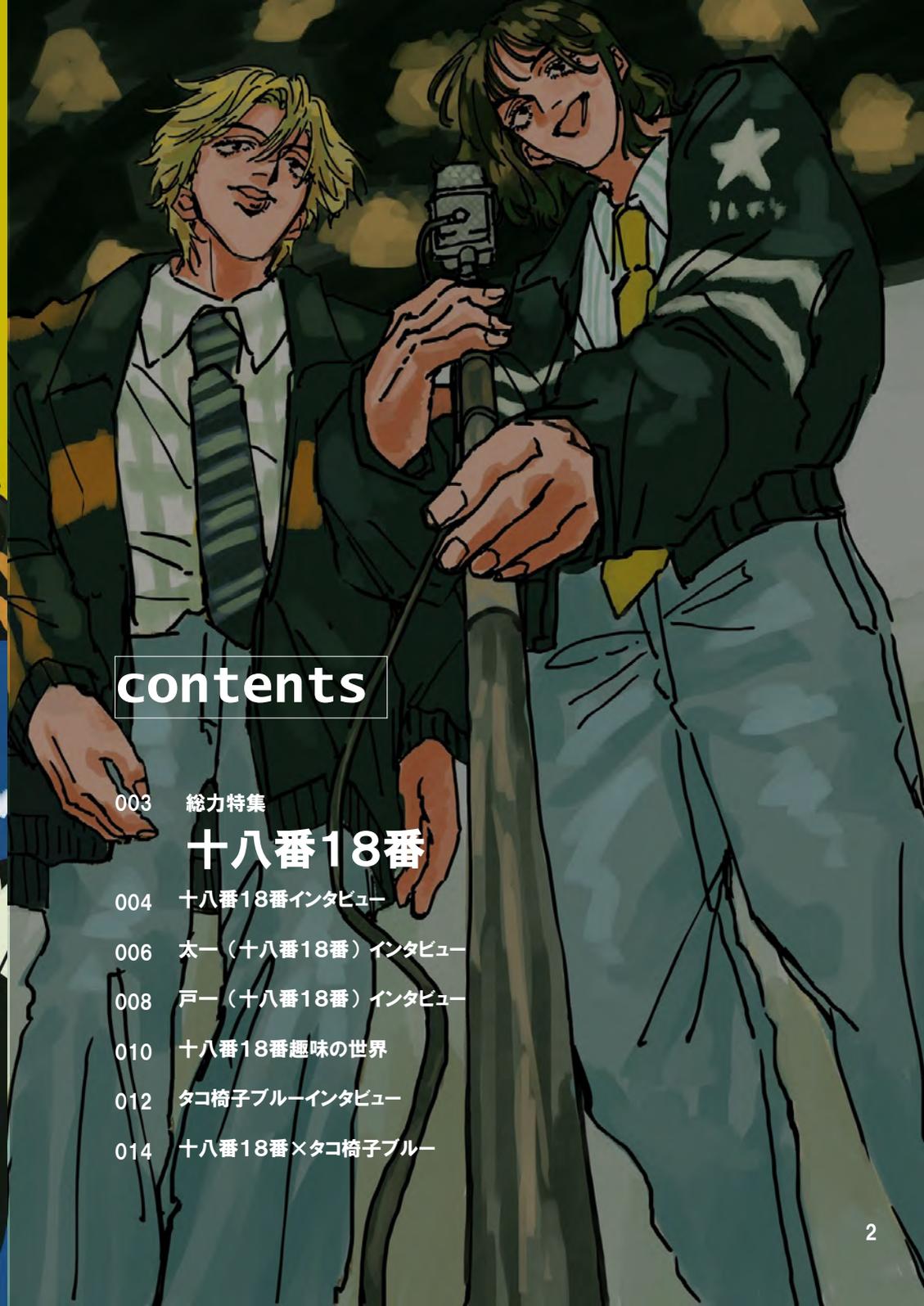


ohako juhachibann

# 十八番18番

月末  
芸人

発行者名：ホニ才 Vol.18



## contents

- 003 総力特集  
**十八番18番**
- 004 十八番18番インタビュー
- 006 太一（十八番18番）インタビュー
- 008 戸一（十八番18番）インタビュー
- 010 十八番18番趣味の世界
- 012 タコ椅子ブルーインタビュー
- 014 十八番18番×タコ椅子ブルー

昨年の「WWW上方漫才コンテスト2024」で優勝した十八番18番。

芸歴7年目で手に入れた王者の冠。

2人の会話からなる引き込まれる漫才はどのようにしてできているのか。謎に包まれた二人の素性に迫る。

▼撮影お疲れさまでした。

戸一 いやあカッコよく撮られてたんで良い雑誌になると思います。

太一 誰が言ってるんだよ。

僕はどんな顔していいか分からなかったんで、仕方なく真顔にさせていただきました。仕方なくです。

▼漫才している姿も間近で撮らせていただきます。

写真なんで、普段言えない愚痴や日々の鬱憤、某俳優のゴシップネタが止まりませんでした。

某が付くほどの知り合いもないんだろ。

ふっふっふ「暗黒微笑」

いいって、暗黒微笑をイジるのが面白いと思って暗黒微笑をこすり続けたらそれが黒歴史になった同期の松坂のマネ！

ツツツ長！

▼お二人は大学からの付き合いだそうですね。

太一

そうですね。でも、同級生コンピュてわけじゃなくて。僕が一個下で、戸一が一個上ですね。僕ら二人とも軽音サークルに所属して。そこで知り合った感じですよ。最初から人数は少なかったんですけど、僕が2年生に上がると3年生が辞めて。すると部員が戸一と僕の2人になって。2人って言っても、かろうじて幽霊部員が残っていて潰れはしなかったんですけど、最初は先輩と二人でどうすんだよって思っていました。

▼最初からすぐに気が合ったというわけではなかったんですね。

太一

というより、最初の年はそもそもお互いに干渉しなかったに近いですね。僕が一緒に入った友達とずつと一緒にいたつてもあつて。友達

ていきました。

▼会社を辞める時の親御さんの反応はどうでしたか。

戸一

俺は辞める直前まで親に言いませんでした。父親が厳格な性格で、絶対に反対されるって分つたので。なので最後は勘当されて家を出ていきました。もちろん後悔はしていません。今思えばもっと早く父に言つてもよかったですね。その一年はほんのりずつとお腹が痛かったの。(笑)

▼その後一緒に吉元の養成所に入り十八番18番を結成したわけですね。ネタ作りはどのようにして作成していますか。

戸一

僕らのネタは自分たちの会話が元になっていきますね。僕はおいぎやさんとかウエバースさんの漫才が好きで、どこかおかしい会話を意識しています。コント漫才には入らず、しゃべくり漫才でやっていたいなというの昔からありました。

も顔出さなくなったんで僕もやめようかなあつて思ってたんですけど、戸一がさり気なく止めてくるんですよ。

戸一

止めるっていうより、様子見してたね。漫画みたいじゃないですか。先輩と先輩の一人ずつしかいない廃部寸前の部活って。

太一

こんな感じで関わりにくかったです。

戸一

とか言ってるんだかんた仲良くなったし、気が付いたら敬語もなくなつてたし。あの敬語からタメ口になるグラデーションすこかったです。

太一

先輩っていうより友達として仲良くなりたくなって思ってたんです。それからは2人でダラダラしゃべりながら楽器弾いたりして、かろうじて部活として成り立ってるかなって感じでした。

▼そこからどうお笑いの世界に入ったのかになりますか。

太一

元々僕はお笑いが好きで、大学を卒業したらお笑い芸人になろうと決めていました。

▼ネタはお二人で作っているということですか。

戸一

俺は何もしてないですね。

太一

堂々とやうな。2人で話していいなと思つた会話を僕が漫才用にブラッシュアップする形ですね。劇場でネタをかけたあとは2人で話し合うことも多いですね。

戸一 俺も全く一緒で…

太一 全く一緒のことないだろ

戸一 俺は卒業したら親の会社に入る予定でした。ずつとやる気のない人生で、このまま何となく生きていくんだらうなつて時に太一に出会いました。たまには面白そうな方に行つてみようと思つてついていき





# 戸一

1997年4月12日生まれ。29歳。

東京都世田谷区出身。

どこか余裕を感じ、飄々とした雰囲気のある彼の起源とは

## 今回のwww上方漫才コンテスト2024の優勝について聞かせてください

めっちゃくちゃうれしいです。(笑)お笑い芸人やってよかったなあって。最初は正直、漫才をやるなんて全然考えてなかったんですけど、太一的情熱に引っ張られて、気づいたら(笑)。グランプリに関しても、太一が作ったネタを必死にやってるだけで、「本当にこれで優勝できるのか？」って不安だらけでした。でも、劇場での反応を見ながら少しずつブラッシュアップして、結果的にみんなが笑ってくれて、優勝できたことがすごく嬉しいです。とはいえ、優勝しても「はい、おしまい」じゃなくて、これからが本番。まだまだ俺たちの漫才は成長していくと思うので、次のステップに進むためにも、気を引き締めないといけないですね。

## ネタはどのようにして作っていますか？

ネタは基本的に太一が作るんですけど、俺も意見を出してます。太一が「こんなネタどう？」って持ってきて、それに俺がボケて反応していく感じですね。ネタのアイデアは、だいたい何もないところから始まることが多いんですけど、太一の発想力は本当にすごくて。ネタが固まっていく過程で、劇場の反応を見ながら、少しずつ修正していくんです。お客さんが笑ってくれるポイントがわかってきたら、その部分を強化していく感じ。俺が「うん、これ面白い！」って思ったら、あとは太一がさらに磨きをかけてくれるので、ほぼ彼に任せっぱなしです(笑)。で、出来上がったものを一緒に演じて、楽しんでるって感じですね。

# 太一

1997年12月12日生まれ。28歳。

東京都足立区出身。

彼から溢れるお笑い愛はいったいどこから来ているのだろうか

## 今回のwww上方漫才コンテスト2024の優勝について聞かせてください

いやあ、正直まだ実感が湧いてないんです。あのトロフィー持たされた瞬間も、どっかでカメラ回ってるの忘れて「あ、重いな」とか紙吹雪すごいなとか。でも、優勝した時、客席がドットと沸いたのを聞いて「ああ、僕たち優勝したんだな」って改めて感じました。今回のネタも100%嘘から始まる会話で、まさかあの設定がここまでハマるとは。ネタを書いた時は「戸一がどう反応するか」で少し賭けた部分もあったんですけど、戸一のボケが見事に決まって。それに助けられたところも大きいです。何より、笑いを愛してくれるお客さんたちのおかげ。今後もっと笑わせて、もっと驚かせる漫才を届けたいですね。

## ネタはどのように作っていますか

ネタは僕が基本的に作るんですけど、完成形になるまでには二人でかなり話し合います。まずは日常の中で「あ、これ面白いかも」って思った出来事や妄想をネタ帳に書き留めておくんです。そこから、「これ嘘の設定にしたらどうなる？」って考えるのが始まりですね。たとえば「実は自分、幽霊に育てられた」みたいな嘘からスタートして、そこをどれだけ真剣に会話で膨らませられるかの勝負です。その後、劇場で試してみてもお客さんの反応を見ながら、ボケやツッコミの間合いを調整するんです。戸一が出してくる意見が意外と鋭いので、ブラッシュアップも二人三脚ですね。



### コンビ名の由来は？

十八番18番と書いておはこじゅうはちばんと読みます。二人とも歌を歌うのが好きなので、カラオケでの十八番はこの曲！という話で盛り上がり、コンビ名に入れました。語呂がよく気に入ってます。

### 太一の第一印象は？

「金髪が似合ってるな」ですね。大学時代から金髪なので禿げてしまわないか心配です。

### 好きなもの、嫌いなものは？

好きな食べ物はイチゴミルクで、嫌いな食べ物はイチゴです。ラジオを聴くことも好きです。

### 相手の好きなところは？

Tポイントが50000円貯まっているところですね。初めて見る数字で感動で涙が止まりませんでした。いただきます、ごちそうさまでしたをしっかり言うのも好きですね。



### 相手の好きなところは？

顔ですね。顔がかなり好きです。長髪が似合う顔ですよ。あと毎朝体温を測っているところですかね。

### 好きなもの、嫌いなものは？

縄跳びが好き？得意です。小学生や中学生の頃は縄跳びで無双していました。嫌いなものはしらすです。一匹一匹と目が合ってから怖くて食べられません。

### 戸一の第一印象は？

つかみどころがなく人当たりがいい感じが近寄りたかったです。一生関わることないだろうなって。あと、「よくしゃべる人だな」ですかね。

### カラオケの十八番は？

凸チツク（でこチツク）の毘沙門天です。サビで思いっきり叫ぶところが好きなポイントです。気分も場も盛り上がる楽曲です。

# タコ椅子ブルー

タコ椅子ブルーは、独特な世界観とシュールな笑いで知られるお笑いコンビ。メンバーはボケ担当のウニ原とツッコミ担当のカニ原。

## 左：ウニ原

ボケ担当。

自由奔放で、観客を置き去りにするような斜め上の発想が持ち味。「なんでその発想に至った!?!」と思わせるボケを連発する。

実は繊細で、ネタが滑ると楽屋で小声で反省するタイプ。

趣味は貝殻集めで、自宅には名前のついた貝殻コレクションが並んでいるらしい

## 右：カニ原

ツッコミ担当。

ウニの暴走を絶妙な間合いで突っ込むスキルに定評あり。「ズレた世界観を正すツッコミ」というより、「ズレた世界観をさらに広げるツッコミ」で笑いを生む天才。

短気そうに見えて、実はすごく辛抱強い性格。

趣味は釣りで、休日にはよく川辺でぼんやりしているとか。

## タコ椅子ブルーの漫才スタイル

シュールな設定が特徴で、「もしタコがタクシー運転手だったら」や「ウニが宇宙に行ったらどうなるか」など、謎の世界観を全力で真面目に展開する。

二人の息の合ったテンポと、どこか切ないオチがクセになるファンも多い。

## 余談

コンビ名の「タコ椅子ブルー」は、二人が初めて出たライブ会場の楽屋にあった青いタコ椅子（丸椅子）が由来らしいですが、深い意味はないそうです。

彼らのネタは「分かる人には分かる」系ですが、ハマると病みつきになる面白さだ。



同期対談！

十八番18番（戸一、太一）×  
タコ椅子ブルー（ウ二原、カ二原）

同期ならではのエピソードやお互いの印象、漫才スタイルについて語り合ってもらいました。



▼まずはお二組が出会ったきっかけについて教えてください

ウ二原 正直、出会った時の第一印象は「この二人、漫才コンビに見えないなあ」って感じでした。十八番18番って、見た目の温度差がすごいんですよね。戸一はやたらと話しかけてくれるのに、太一はずっとそっけない感じで（笑）。

戸一 そうだった？でも最初は太一が誰ともあんまり喋らないから、「え、この人同期で大丈夫？」って思われてたかも。でも、ネタをやると一気に「何この人？」って注目される。僕もそこに惚れ込んで誘いに乗ったんです。

カ二原 でも、舞台上だとコンビのバランスがすごく良いよね。俺らも劇場の楽屋で最初に見た時、「お、これ

はいぞー！」って思いました。

戸一 そう言ってもらえるのは嬉しいね。でもタコ椅子ブルーも、初めて見た時のインパクトが凄くて、「タコがタクシー運転手だったら」って、もう発想が面白くて。この漫才が受け入れてもらえず爆死しているのを見たとき親近感が沸くのと同時に嬉しくなりました。面白いやついるぞって。

ウ二原 十八番18番の「実は地球は戸一の実家だった」ってネタも負けてないと思う。あれは伝説級に笑った記憶ある。やっぱりどこか笑いの感性が似てるのかも。

▼お互いの印象や、普段の関わりについてどう感じていますか？

太一 ウ二原は、「自由に見せて計算してる人」って印象ですね。ボケがめっちゃくちゃ尖ってるのに、なぜかちゃんと成立してるのがすごい。カ二原はその軌道修正がうまい！ツッコミというか補強に近いですよな。

戸一 カ二原は俺から見ると「お兄ちゃん」みたいな感じですよ。楽屋とかで雑談しても、なんか落ち着くんですよな。

カ二原 それ言われるのちよつと恥ずかしいですけど（笑）。俺から見ると、戸一は「意外と負けず嫌いな人」ってイメージです。普段は飄々としてるけど、舞台上では負ける気がないのが伝わってくる。先輩っていうより友達として仲良くなりたくなってるんです。それから二人でダラダラしゃべりながら楽器弾いたりして、かろうじて部活として成り立ってるかなって感じでした。

ウ二原 戸一は「場を温めるプロ」だね。楽屋で戸一が喋り始めると、その場が一気に和むじゃないですか。コンビの太陽って感じですよ。

太一 俺は？！

（一同笑い）

▼それぞれの漫才スタイルについて、同期ならではの視点で教えてください。

ウ二原 十八番18番のしゃべくり漫才、めっちゃ好きです。あの「100%嘘設定で真剣に会話する」っていうの、ちよつと懂れますね。俺たちは嘘を真剣にやるといふより、「嘘を嘘っぽく笑わせる」感じなので。

太一 タコ椅子ブルーは、その「嘘っぽさ」を堂々と見せるのが凄いなと思う。僕らはわりとリアリティを求めてしまうので、あの大胆さは羨ましいですね。

戸一 二人のネタって、見てて不思議な安心感があるんですよ。「これ最後どうなるんだ？」って思わせつつ、ちやんと綺麗に終わるから。

カ二原 いやいや、十八番18番もすごいよ。「しゃべくり漫才」でここまで観客を引き込むのって、話術が相当上手くないとできないですから。特に太一さんのツッコミ、シンブルだけどかなり刺さるね。

▼最後に、同期としてお互いに期待していることやエールをお願いします！

太一 タコ椅子ブルーには、もっともっとシニール漫才を突き詰めてほしいです。僕らにない独特な世界観があるので、それを武器にどんどん新しい笑いを作ってほしいですね。俺からも一言、いつか一緒に大きな舞台に立ちたいです。それこそ東京ドームとかで、タコ椅子ブルーと共演できたら最高ですね。

カ二原 東京ドームは一旦置いて、（笑）俺らが十八番18番に期待するのは、とにかくずっとしゃべくり漫才を続けること。あれだけの完成度でやれる人たち、他にいないですから！

ウ二原 俺たちも一緒に上を目指したいですね。そして、いつか同期4人で漫才界を盛り上げる存在になれるといいなと思ってます。目指せ！東京ドーム！

カ二原 もついいって！（笑）



## 編集後記

今回の雑誌は芸人好きの私が生み出した創作芸人たちをあたかも存在しているかのように製作しました。私はイラストを描く際に背景込みで書くことで“そこにいる”という存在感に重きを置いて作成しています。そこで、この雑誌ではインタビューに対して受け答えしているキャラ、背景付きのイラストを掛け合わせることでまるで本当に存在しているかのように製作しました。さらに、各キャラクターの性格や背景に合わせた衣装や小道具、表情を細かく描写し、その人物が本当に存在しているかのようなリアリティを追求しました。インタビューの内容も、彼らが実際に芸人として活動しているかのように、自然な会話の流れを意識して構成しました。キャラクターがそこにいるかのように感じてくれたらうれしいです。

## 月間芸人

2025年1月22日 初刊発行

著者 ポニオ

定価 1500+税

発行所 ポニオ株式会社